

論文

企図と分有

—— ゲーテッド・コミュニティに対する視角を巡って ——

古市 太郎*

- 0 問題の所在
- 1 現代の諸相—流動性の増大する社会—
- 2 gated community に対する視角
 - 2-1 監視社会化という視角—要塞化するコミュニティ—
 - 2-2 連動する監視の強化—規律から管理へ—
 - 2-3 住民自治組織による共同統治という視角
- 3 分有 (partage) による共同性
 - 3-1 ‘企図の観念’—‘われわれ’の形成—
 - 3-2 有限性の自覚
 - 3-3 「われわれ」という表明・露呈
 - 3-4 生活を営む経験の共有
- 4 結びにかえて

0 問題の所在

現在、社会における共同性の問題は、社会学が成立した時期に議論されたように、社会は個人の総和を超えた独自の実在性を持つのか（方法論的集合主義）、それとも諸個人の総和から成るものか（方法論的個人主義）、といった議論の形をとることは難しくなっている。さらに、社会における共同性を、諸個人を統合する関係、ないしは個人間の相互的な関係として捉える視点は、共同性についての語りや問いを失わ

せてしまうことになる。なぜなら、各々の視点は、自律的、理性的な主体を想定し、出来上がる関係も完結するものとして想提されているからである。つまり、社会的属性を同じくする‘われわれ’を前提とした関係である。したがって、社会学が問題としてきた社会における共同性という次元は、新たな段階へと移っている⁽¹⁾。

むしろ、現代において共同性は、このように完結しうる関係を捉え直し、その関係から排される共約不可能な (incommensurable) ものたちとの関係こそが問われる問題であると考えられる。したがって、共同性の問題は、社会的属性を異にする者たちと、どのように共同しうるのかという点へと向かう⁽²⁾。

さらに、現代において、その共同性が問題とする現象が生じている。経済のグローバル化が世界全体を席捲していく中で、人々は異者と接触する機会が増え、同時に彼らに対する不安も広がる。都市、特に郊外では、よそ者の排除を通じて、壁やゲートで居住区全体を囲い込む gated community が形成されるまでに至った。だが、この community 形成は、よそ者に対する不安に原因があるだけではなく、むしろ、住民自身の日常生活の確保、私生活中心主義による

* 早稲田大学大学院社会科学研究科 博士後期課程3年

ところが大きい。さらには、公的領域をもバリエーション封鎖することで生活の防衛を行うにまでになった。現代では、その gated community に対する視角として、監視社会化の一環とみる立場と、住民自治組織による共同管理の場と捉える立場とがあり、まずはこの両視角についての考察から始める。

そして、本論文の目的は、このような gated community に対する各々の視角が前提とする共同性の原理を明らかにすることにある。なぜなら、両立場の視点の相違を決定づける点が、共同性をどのように捉えているかによっていると、筆者は考えるからである。その論拠としてジョルジュ・バタイユ、ジャン＝リュック・ナンシーを踏まえながら、最後に、社会的属性では違いがありながらも、人間存在のあり方の次元での共有、つまり生活を営む経験の共有からなる共同性、「われわれ」の提示を試みる。

1 現代の諸相

—流動性の増大する社会—

世界全体は経済のグローバル化という状況下であり、世界規模で様々な変容が引き起こされている。その経済のグローバル化の進展を、ジークムント・バウマンは、「liquid modernity」（流体化社会）とよび、流体化社会とは、「重厚長大」に力点を置いた‘重い’近代が空間制覇、規模の拡大を目指した時代から、「軽薄短小」を重視する‘軽い’近代(liquid modernity)へと移行することを表す[Bauman 2000a=2001: 149]。そこでは、情報技術や移動技術の発達による世界同時性の達成、ヒト・モノ・カネの流動性の増大から、資本が利ざやの高い短期資本を求め動くことで、労働市場の変質や移民による越境

が生じ、異者(stranger)との接触の増大がもたらされる。

また、ジョン・トムリンソンは、経済のグローバル化を‘脱領土化’と‘再領土化’という点から分析する。経済のグローバル化は毎日の生活を送る場所や土地と密接な関係を持つ生活面にも大きな影響を与える。そのグローバル化は、文化と土地との密接不可分な関係を解消するような‘脱領土化’という状況をもたらす。つまり、空間的に限定された領土の結びつきから人々の生活を引き離す。さらに、土地への埋め込みを解かれた文化活動は、他の文化活動と交じり合い、文化が雑種化・ハイブリット化してきている [Tomlinson 1999=2000: 210-214]。

しかし、領土的な結びつきから解かれるという‘脱領土化’(de-territorization)の動きは、必ず再度、場所的なつながりを求める‘再領土化’(re-territorization)を引き起こす。文化と場所との関係は、分離不可能な関係だからである。その再領土化は、単に、脱領土化以前の純粹で完全な関係へと戻ることを意味しているわけではなく、むしろ、より複雑な文化的結合・空間の変容を意味し、新たなローカル性を生み出している [Tomlinson 1999=2000: 246-259]。

そして、この両方向への動きをもたらすグローバル化は、血統神話的な純粹性への希求をも引き起こす。つまり、脱領土化という動きに対する再領土化の中で、未知の者との交流に対する不安から、グローバル化は、社会的属性を同じくする者たちだけからなる文化的結合へと向かわせる。したがって、その結合には、社会的に異質な者の排除によって、同質性に基づく‘われわれ’の形成が生じている。

このように、現在、世界の流体化への反動が

ら異者に対する防衛としての「共同性（体）」、同質性に基づいた‘われわれ’が希求される。見知らぬ者との共存への不安、絶え間ない流動に曝されることで生じる不安から、人々は、社会的属性を同じくする者とのだけの接触を求めていく [Sennett 1998=1999: 198, Bauman 2000a=2001: 142, 247]。そして、その同質性に基づいた共同性は、「友-敵」といった排他的な関係をうみだすことで、同質的であるという‘われわれ’を形成していく。

さらに、問題は排除の連鎖へと変容していく。確かに、社会的属性を同じくする者たちの集まりであれば、確固たる関係が築かれると思われる。しかし、帰属を共にする者たちからなる共同性は、排除の連鎖、リチャード・セネットのいう「破壊的ゲマインシャフト」を引き起こしやすい [Sennett 1976=1991: 376]。例えば、「9・11」の事件でも、そのことは起きた。「9・11」以降、アメリカはテロリストを敵として想定した。この想定により、アメリカが「アメリカ」として強固に団結するかと思われたが、逆にアメリカ自体の同質性の安定さは揺らいでしまった。さらには、テロへの戦いに対する批判者は、言論のテーブルから排除された⁽³⁾。つまり、同質性に基礎を置く共同性には、異質な者と接触することに対する不安や、同質性の高い者だけで接触することへの欲望があるため、欲望の高まりが、‘われわれ’への純粋さを競わせ、逆にその共同性を崩壊へと追い込むことにもなっていく [Sennett 1976=1991: 432]。

2 gated community に対する視角

2-1 監視社会化という視角—要塞化するコミュニティ—

以上のような、社会の流体化や異者に対する不安から、同質性に基づく‘われわれ’が構築される社会現象をみだが、都市においても、その現象は顕著になっている。マイク・デーヴィスの City of Quartz の第四章に「要塞都市 LA」と題される章があるように、都市において、異者との接触、不安から、封じ込めと同時に自らを閉じることで築く、都市の‘要塞化’が起きている⁽⁴⁾。つまり、gated community である。

この gated community に対する捉え方は、gated community を監視社会化と連動させて、コミュニティが排除に基づき形成されるという監視社会化の一環とみる立場である。これに対して、2-3で、gated community に対するもう一つの視点を考察する。それは、gated community を集合住宅と考え、住民自治組織による共同管理の場として捉える立場である。本節では、この gated community に対する視角を概観する。

1980年頃からアメリカで、実際に、gate やバリケードで封鎖してコミュニティを形成する gated community が現れ始めた⁽⁵⁾。gated community とは壁や門、バリケードによって外界から区切られたコミュニティのことである。gated community それ自体最初は、何も排除や隔絶を目的として作られたコミュニティではなく、それは本来、郊外化の一環であった。1960～1970年代では、超富裕者層や退職者向けの保養地という意味合いが強く、都市中心部から離れた場所で生活を送る‘持てる者たち

(haves)’の住宅地を意味していた。1980年代以降、ディベロッパーや開発業者の戦略や、住宅価格も手ごろとなり、購買層も中流階層へと広がって、gated communityの意味は威信やシンボルとしての住宅地へと変わり始めた。現在、エドワード・J・ブレイクリーとメアリー・ゲイル・スナイダーらの調査に依れば、gated communityと居住区の住民数は、1990年代末時点で、約19,000ヶ所あるgated communityに、840万人にのぼる人々が居住していると推定されている [Edward J. Blakely, Mary Gail Snyder 1997=2004: 242]。

ブレイクリーとスナイダーは、gated communityを三つに分類する [Edward J. Blakely, Mary Gail Snyder 1997=2004: 38-51]。一つはライフスタイル型コミュニティーである。これは先述した退職者や‘持てる者たち’が対象となるもので、ゴルフとレジャーのためのコミュニティー、郊外のコミュニティーといった余暇生活を送ることに重点をおいた空間である。次は、威信型コミュニティーである。gated communityに入ること自体が、社会的地位・威信を示し、まさにgateこそが威信・名誉のシンボルとなっている。最後に筆者が問題とする、保安圏型コミュニティーである。犯罪とよそ者に対する不安が自己防衛、要塞化に向かわせ、外界から閉ざされることでコミュニティーの形成はかる。他の分類との決定的な違いは、gateを作る者が、前者においては不動産屋・開発業者であるのに対し、保安圏型では住民たち自らによるという点である。

たしかに、gated communityは郊外化の一部であって、これ自身が不平等や差別を生み出すわけではない。しかし、バウマンが指摘するよ

うに、人種問題、所得の二極化、よそ者に対する不安などとの関わりから、gated communityは排除・隔絶を生む空間へと変貌していく [Bauman 2001b: 116]。

このように、gateによるcommunity形成の意味合いは、郊外化一環から、不安に対しての日常生活の確保、私生活を中心に生活を送ることを目的とした保安圏型のgated communityへと変化する。彼らは、よそ者を排除・隔絶するというよりは、むしろ不安から自らの空間を囲い込み、外部に対して閉ざし、コミュニティを形成する。

さらに、よそ者に対する不安から、ブレイクリーとスナイダーが指摘するように、誰に対しても開かれているはずの公的領域をも私有化していく。カルフォルニア州のサンライズ・パークは、公的領域である街路に対してバリケード封鎖を行った。その理由は、自動車交通量とそれに比例したよそ者との接触可能性の増加に対する自己防衛からである⁽⁶⁾。また、住民たちは、誰もが利用可能な街路を、現実生活する居住地区にバリケードをはることで、私有化し、通行権使用の改変を州政府へと求めるようなことも起こしている [Edward J. Blakely, Mary Gail Snyder 1997=2004: 136-147]。

したがって、他者との共同のあり方、共同性という視点から見れば、gated communityは、よそ者を排除する仕方で、共同性を形成している。結果的に、gateはその外界に対して、排除のメッセージを送り、内部には同質性と安定を与え、gate自身が同質性を保つための手段として信頼を得る。gateはコミュニティ形成のための不可欠な手段であると思われる。しかし、コミュニティ形成において、よそ者に対する不安

という理由よりも、むしろ、日常生活を守るためなら公的領域をも私有化するという私生活中心化〔‘生活保守主義’ 五十嵐 2004: 239〕が、大きな根拠である。このように、生活を防衛するために、コミュニティは要塞化していく傾向にある。

2-2 連動する監視の強化

—規律から管理へ—

よそ者に対する不安から、各人の私生活を確保する形で gated community が形成される傾向は強まった。さらに、その傾向は、不安、リスクの最小化へと動いていく。その最小化を目指す中で、住民も、よそ者を監視する方向へと向かい始め、コミュニティは「過防備」化する。しかし、そこで向かう監視形態はミシェル・フーコーのいう「規律訓練型」[Foucault 1975b=1977: 142-144] に電子技術発達を考慮したマーク・ポスターやデーヴィット・ライアンのいう「超パノプティコン」[Poster 1990=1991: 165-184], 「予見先制型」へと変容していく [Lyon 2001a=2002: 255-258]。

ポスターらの超パノプティコンという監視形態は、物理的空間に閉じ込めて監視する形態ではなく、電子テクノロジーの発達に大きく依拠しており、監視カメラに代表されるように日常生活に浸透している。その新たな監視システムの変容には、技術発展も大きく関わるが、私生活中心主義が蔓延していく背景や、漠然としたよそ者に対する不安も大きく作用している [Lyon 2001a=2002: 100]。何もかもが、誰もが不安を引き起こす対象となりうるという漠然とした状況が、技術革新と治安強化に拍車をかける。社会全体が、日常生活、安全の確保を得る

ために、よそ者や犯罪者の出現に対して、取締りを行い、監獄へと送り、編成し直すよりは、むしろ、彼らに対して、自らが予見先制的に行動し、追跡し続けるための監視システムを作り出すことで、不安・リスクの最小化を目指す方向へと向かい始めている。つまり、社会が向かっている方向は、私自身による生活の防衛、不安の最小化を目指す方向である。

このように、超パノプティコンは、フーコー的な「規律訓練型」に技術導入を図ることで、さらなる精密さを持ち、‘よそ者’や‘犯罪者’というイメージ、シミュレートされた対象を基に、人間集団を分類、区別し、さらに分類を再生産、強化していく監視システムである [Lyon 2001a=2002: 158-177]。それゆえに、シミュレーション・モデルを構成していくためには、情報・データ収集が最も重要となる。つまり、情報をもとにシミュレーションは、今現在のリスク、不安を予見、予防し、いつでも先制行動をとる準備を可能にする。したがって、日常生活がシミュレーション化し、そのシミュレーションに基づいて規定されていく。やはりこの予見先制的なシステムを支えるのは、よそ者に対する不安と日常生活の確保という願いである。ポスターは、著書で、この監視システムの例として消費者行動を観察するマーケティングを挙げているが、むしろ現在、日本においてさえ、「犯罪者マップ」という形で、予見先制的監視システムは浸透し始めている⁽⁷⁾。

この監視の移行を、規律型から管理社会への移行だと説明するのが、ジル・ドゥルーズである。「私たちは管理社会に足を踏み入れている。管理社会は監禁によって機能するのではなく、不断の管理と瞬時に成り立つコミュニケーション

ンによって動かされている」[Deleuze 1990＝1992:288]。つまり、監視システムの目的が、よそ者や犯罪者等の更生や正常化から、彼らに対する住民の不安と生活の防衛により、予見先制的な管理へと変容してきている⁽⁸⁾。

このように、gated community が過防備・監視社会化へと向かう傾向には、よそ者に対する不安が大きな動因となっている。しかし、他者との共同のあり方という点においては、住民たちは受動的になり、コミュニティ形成意識の低下が促される。さらに、この傾向は、コミュニティが家族的、温情的な理想郷であるという幻想を引き起こすことにつながっている。それゆえに、gated community を監視社会化の一環として捉えることは、二つのことを同時に引き起こす。つまり、幻想としての「コミュニティ＝安らぎの場」という希求が誘発されながら、同時に、自分たちでコミュニティを作り上げていく当事者意識は欠け、技術的処理に依存する傾向が強くなっていく。

2-3 住民自治組織による共同統治という視角

他方、gated community に対するもう一つの視点は、gated community を「集合住宅 (Common Interest Development)」として考え、私的政府・住民自治組織という政治学的観点から捉えるものである。集合住宅は、建築といった物理的側面よりも、共同所有や管理を前提とした多世帯住宅であるから、民主的政治プロセスを伴う住民自治組織が採られている。この住民自治組織を公的政府と対比する意味で「私的政府」と捉える⁽⁹⁾。このように、エヴァン・マッケンジーは私的政府の誕生を集合住宅にみて、

CID に関する設計計画という面よりも、むしろコモンを含む居住区を住民が共同統治する「CID」体制に注目する。したがって、居住区の住民自治組織 (住宅所有者組合) の統治が、「私的政府」として見られるかの分岐点である。

アメリカでの集合住宅の普及は、郊外化の一環としてみた gated community と時代を同じくする。集合住宅の住民ら、特に富裕者たちは、自らの居住区にある住民自治組織に対して負担費用を支払うことで、公的政府と同等のサービス、警備、ゴミ回収、歩道の修繕などを受ける。にもかかわらず、彼らは地方政府に対し、固定資産税を払う税金の二重払いという問題も抱えていた (Edward J. Blakely, Mary Gail Snyder 1997＝2004: 296)。そして、竹井氏は、『ゲートッド・コミュニティ』の後書きで、ブレイクリーとスナイダーの捉える gated community に、この CID、コモンとよばれる広場、公園、街路、レジャー施設などの共用領域を有する居住区が、見落とされていると指摘する [Edward J. Blakely, Mary Gail Snyder 1997＝2004: 243]。

マッケンジー自身は、gated community そのものにはふれていないが、この CID の居住区全体を壁やゲートで囲い込み、外界から遮断される形での居住区が現れ始めたという [McKenzie 1994＝2003: 221]。前節で、gated community の分類を見たが、竹井氏も、保安圏型の gated community に注目している。なぜなら、保安圏型が様々な形で現れているからである。特に、日本でいえば、超高層マンションは威信型と保安圏型が併合した究極の gated community であるという。

アメリカで gated community が浸透する理

由として、「アメリカのゲートッド・コミュニティでは保安という強い居住者全員の意志があり、それを目的としたゲート設置や警備員雇用にかかる費用の負担や、ゲート設置による出入りの不自由さといった「制限」が受容されている」[竹井 2005a: 97] からである、と竹井氏は説明する。つまり、住民それぞれの権利に対する「制限」の受容（安全の希求）と、それを住民自治組織が管轄するという当事者意識が、そのコミュニティを支えている。つまり、公園や街路などの建築物や物理的側面を重視するのではなく、それらを利用し管理していく統治に力点が置かれている⁽¹⁰⁾。

本章で概観した gated community に対する各々の視角を、日本で初のセキュリティ・タウンである「リフレ岬・望海坂」を通じて、各々の視角を比較してみる。このセキュリティ・タウンは、2002年に大阪府郊外の泉町に分譲住宅地として販売された。特徴はセキュリティ体制にある。第一に、ホーム・セキュリティにおいて、各住宅に侵入があった場合には、センサーが作動し専任警備員が出動することになっている。第二に、24時間、タウン内に常駐の警備員が配置されている。そして第三に、ウェブカメラが設置されており、タウン内の公園等からの映像を各居住者だけが自宅のPCで確認できる。

このように、「リフレ岬」は、三つのセキュリティから成る居住区全体の集团的セキュリティ体制をとる。監視社会化を危惧する、五十嵐氏は、「リフレ岬」を、防犯機能を高めた都市・住宅を過剰な安全追求の一環として捉える[五十嵐 2004a: 163-164]。さらに、こうした居住区が、ゲートでの入居者審査を行うまでに至るで

あろうと警告を発する。これに対して、竹井氏は、共同統治の場と捉える視点から、「入居の制限ができないからこそ、居住者全員による警備会社との警備業務委託契約締結を担保できないというジレンマをデベロッパーは常に抱えて」と述べる。だからこそ、「リフレ岬」が物理的障壁を強調せずにハードへの依存を最小限に抑えようと試みている」と指摘する[竹井 2005a: 204]。つまり、技術的処理の限界を踏まえた形での集団セキュリティということである。

この両者の視点の相違は、コミュニティの完結が不可能であるという自覚の存否にある、と筆者は考える。もちろん、五十嵐氏も監視社会化に対して完全に賛成するといった立場ではないが[五十嵐 2005b: 14-18]、監視社会化の視点は、コミュニティが理想郷であるという幻想を誘発し、当事者意識の欠如と科学技術への依存と信仰を強化する[David F. Noble 1997: 3-6]。それゆえに、いっそう同質な‘われわれ’によるコミュニティ形成を目指す。これに対し、gated community を住民自治組織から捉えるという視点は、コミュニティの完結不可能性の自覚から捉えられている。竹井氏自身が、「制限」の受容と記しているように、コミュニティや住民（人間）が他者性に貫かれ、有限な存在であるため、有限性を自覚することから、コミュニティの形成がはかられていると、筆者は考える。

3 「分有」による共同性

3-1 ‘企図の観念’—‘われわれ’の形成—

では、各々の gated community の視角の背後にある共同性の原理は何であろうか。結論から

いえば、監視社会化の視点には、同質性に基づいた‘われわれ’を形成する「企図」の思考が働いている。他方、住民自治組織の視点には、「われわれ」の露呈・表明である「分有」の思考が働いている。この3章では、両立場の根底にある共同性の原理を明確にすることを目的とし、その原理が前提となるからこそ、各立場が成立することを明らかにする。

まず、企図の思考の説明から始める。「企図」は西洋の伝統的な思考である^[1]。救済、進歩、保存、生産など、西洋または近代の概念にも企図が貫かれている。例えば、「生産」は、ある未来の目的（利益）を基にし、それに合わせて現在を手段化していく思考である。だからこそ、目的に合わないものは排されるか、または合うように変形させられていく。その企図による共同性の形成とは、individualな個人を、ひとつの共同の価値、同質性の名の下に、統合・回収することを目的とする。西洋は、この共同性を絶対的な「目的＝終焉」とし、実体化を目指した。つまり、共同性は、社会的特質の同質性を基に、individualな‘われ’を、上位の‘われわれ’へと融合・合一させる共同性だといえる。

この西洋の根底にあり続ける企図の思考により、共同性が、一つの社会的特質に基づくものであるという単一への幻想が定着していったといえる。このように、企ての思考は、西洋の通奏低音であり、‘われわれ’という同質性による共同性は、西洋に根づく共同のあり方である。

この‘われわれ’が形成される時には、各々が社会的特質では同等であり、コミュニティ内では、何の制限も無い者どうしの完全なる集まりとなっている。だからこそ、各々が社会的同

質性を求めるために、各々自身の差異が埋め合わされ、同質性に基づいた‘われわれ’全体という抽象的な集合体が形成される。

そして、共同性と gated community の監視社会化の関連については、共同性が同質性に基づく‘われわれ’という条件であるからこそ、監視社会化の浸透に拍車がかかっていると考えられる。なぜなら、不安が同質性を揺るがす度に、すでに同質性に基づいた共同性の原理が前提となっているため、コミュニティの住民らは、同質性に基づいた抽象的な‘われわれ’という全体を守ろうとすることになるからである。だからこそ、必然的に、‘われわれ’全体を守る技術＝監視する技術の導入を受けいれる方向へと向かうことになる。したがって、監視社会化と捉える視角には、社会的特質を同じくする‘われわれ’全体が前提となるから、その視角は、gated community を、‘われわれ’全体に対する監視や過防備の問題として捉えてしまうことになる。

3-2 有限性の自覚

他方の視角である集合住宅における住民自治組織の視点の急所は、各住民の権利に対する「制限」の受容と、それを住民自治組織が管轄するという当事者意識にある。共同性の文脈から考えると、「制限」の受容は、ジャン＝リュック・ナンシーの有限性の自覚と同じであると考えられる。まずは、その視角の背後にある共同性の原理を明らかにするために、有限性の自覚を軸に、共同性を考察するジャン＝リュック・ナンシーをみていく [Nancy 1999c=2001: 45-56]。

ナンシーは、西洋、また近代の共同性は、根

源・内在・本質などの同質性を起源にする企図の共同性だと捉える。それに対して、ナンシーは企図による共同性と違う共同性を明らかにする。なぜなら、同質なものと完結・統合しえるということは、「われわれ」という露呈・表明が生じることはないからである。つまり、最初から共有する社会的同質性が前提とされるならば、「われわれ」や「共にある」という問いは生じない。だから、ナンシーの共同性において、「われわれ」とは絶えず露呈され、純粹、純潔な同一性や帰属を有した集まり、「われわれ」を表すのではなく、新たな共同のあり方の出現を表明している。

例えば、ナンシーの有限性の自覚は、「生まれる」、「死ぬ」という人間の根源的事実に現れる。「生まれる」は、自分自身で能動性をもって行われる行為ではなく、誰か他の人の助けによってなされる。また、死についても同じであり、人間はそもそも自分自身の死を体験することができず、常に他人の死に臨在することしかできない。だから、死は、ハイデガーのように、上位の「われわれ」を、民族共同体を想起させるものではなく、自己完結が不可能な出来事である¹²⁾。死という出来事に臨在し、臨在する者たちは互いの有限性に曝され、「私と共にあなた」として共に「現れ」ている。したがって、この「共に現れる」ことを、ナンシーは「分有」という。つまり、有限性の自覚を通じて、社会的属性での差異があるが、人間存在のあり方において共有することへ向かう共同性が、partage（分割＝共有）である [Nancy 1999c=2001: 45-56]。また、ナンシーは、この分有が、自己完結の不可能性を埋め合わせ、再度、社会的属性を同じくする「われわれ」を形成するものだと

考えてはいない¹³⁾。

3-3 「われわれ」の露呈・表明

このような有限性の自覚、私「と」あなたという自覚こそが、新たな共同性を見出す。これは、私「と」あなたの並置関係、互いが同じであることを示しているのではない。むしろ、その「と」は、私「と共に」在るあなたという露呈関係を表している。私「と」あなたという表現は、一つの体系、つまり、あるものを意味づける枠組みが、意味づけることができない状況に陥っていることを表している。だから、ナンシーが主張するように、私が存在するには、徹底して他者性に貫かれており、私「と共に」在るため、他の関係を築きうる存在である自身の複数性が、共同性の根幹となる [Nancy 2000d=2000: 64]。

ナンシーの複数性とは、関係の可能性を開く多様性のことであり、単に価値観の相対化、視点の相対化を意味しているのではない。私「と」あなたが意味するのは、「われわれ」全体という抽象的な集まりへと無媒介に統合されることに対する抵抗である。「われわれ」は、「われわれ」全体という抽象的な集合体ではなく、ある問題状況に接することで、初めて現れるのである。だからこそ、私自身は単体でありながらも、他の関係を築きうる可能性を持つ多様な存在である [Nancy 1991b=2002: 71-75]。すなわち、私「と」あなたから成る「われわれ」は、「われわれ」が、「彼ら」を想定して初めて成立するのに対し、絶えず、「われわれ」・「彼ら」という意味づけへの抵抗として現れる。ナンシーの「われわれ」という表明は、ある一つの意味作用に包摂された互いが、「われわれ」として曝け出

し、新たな意味を露呈し、同化作業に対する抵抗のことである [Nancy 1999c=2001: 63-64]。なぜなら、「われわれ」という表明は、人間の根源的な存在が「共存在」であることの証明であるからだ。

さらに、その表明は、「彼ら」といった外部に位置づけられたものからの表明だけではなく、「われわれ」と同質的なものとして位置づけられた側からの表明でもありうる [Nancy 1986a=2000: 110]。ナンシーの共同性は、「共約可能なもの・「われわれ」／共約不可能・「彼ら」」という二項図式を超える試みで、どのように共約不可能なものたちと共同していくのかという点が争点である。

したがって、個人の有限性を自覚し合い、他の関係を築きうる複数性の立場は、各個人の「制限」を受け入れ、それを共同管理していく当事者意識によるコミュニティ形成と同じであると考えられる。どのように互いの他者性を共有するのかということである。そこには、共同性が完結しうるものではなく、完結不可能さを互いがどのように共有していくのかという思考が働いている。だからこそ、「リフレ岬」の件でのウェブカメラによる見守りや、セキュリティを警備会社へと完全に依存しないことも、「制限」の受容を共有し、当事者意識からなる自主的な参加という、「分有」の視点がある。なぜなら、共同性が他者性から成るという自覚から、社会的特質が違いながらも、他の関係を築き上げようとする「われわれ」が露呈し、表明されるからである。

3-4 生活を営む経験の共有

この「分有」からなる共同性という視点は、

現代のグローバル化、流動性が増大する社会に対しても、重要な視点をもたらす。例えば、それは、フランスでのイスラム・スカーフ問題に現れている^[4]。この問題は、1989年に、フランス政府が、自国文化・伝統への侵略を恐れて、禁止したことから始まる。しかし、2001年9月11日の後、イラク戦争が行われ、戦中でのテロリストによるフランス政府に対する要求がなされてから、変化が現れた、と筆者は考える^[5]。フランスに在住するアラブ人たちは、「イスラムーヨーロッパ」、「友ー敵」図式による自身へのレッテル張りに対して、互いのイメージを露呈し合い、現段階での妥協点を探った。つまり、スカーフ問題とそれに伴ったテロリスト要求を境に、その住民にとってのフランス文化とイスラム文化とは何かが曝されたわけである。一定のイメージ、幻想として規定されていた「われわれ」が、ある問題を通じて、「私と共にあなた」という新たな関係の可能性へと開かれた。

つまり、「われわれ」とは、ある問題を通じて互いが当事者同士となっているという意味である。だからこそ、新たな関係が開かれていく。しかし、「われわれ」全体という抽象的集合体からなる共同性は、当事者意識を失わせる。なぜなら、「われわれ」といった共有するものが最初から存在し、「共に」何かをするという動きや問いが生じることはありえないからである。したがって、「われわれ」は、社会的特質では分割されているが、その問題に対して、当事者意識から共有し合う、分割かつ共有という「分有」が働いている。それゆえに、新たな関係の可能性を開くことへとつながる。そして、イスラム・スカーフ事件を通じて、「私と共にあなた」という露呈関係にある住民たちの分有を支えている

ものが、そこで生活を送っているという経験の共有であり、それこそが分有を可能にする。

gated community に対して、直接的で有効な解決策を提示することは難しいが、一つの視点を示すことはできる。イスラム・スカーフ問題でそうであったように、社会的特質という点では分割されているが、生活を送る経験の共有からこそ、互いの新たな関係を構築し始めることができた。今後、絶えず、「われわれ」として関係を表明し続けていくだろう。

gated community についても、コミュニティの関係性を完結することが不可能であることを自覚しうること、互いを「分有」し、その分有を可能にさせる生活を営む経験へと目を向けることになるだろう。確かに、分断をもたらす壁を壊すことで、物理的な隔絶は無くなるであろう。しかし、解決は簡単ではない⁶⁶⁾。根本的に、共同性という問題から切り込まなくてはならない。そのためには、有限性の自覚からなる、互いの他者性をいかに共有しあうのかという点から始めなければならない。なぜなら、共同性の原理が、gated community を監視社会化の一環か、共同統治の場であるのかを、方向付ける大きな要因となっているからである。

つまり、コミュニティを「われわれ」として捉えることは、当事者意識の喪失をもたらし、監視技術による防衛に依存することにつながった。他方、「われわれ」という当事者意識から共有し合う共同性は、技術依存とは違う防衛が見出せるであろう。

したがって、各人自身の他の関係を構築しうる多様性と複数性を支える生活経験の共有こそが、新たな関係の可能性を開く鍵であると考えられる。

4 結びにかえて

以上の考察を通じて、「分有 (partage)」が新たな共同性の原理であることが分かった。共同性の問題は、社会の共同性が個人から成るのか、また社会という独自の存在から成るのかという従来の議論から移行してきている。それは、いかに社会的特質を異にする者と共有し合い、共同性が他者からなるという自覚が問題となった。

現代での gated community という壁で囲まれた居住区における問題に対しても、「分有」による共同性は新たな視点をもたらした。

まず、gated community を監視社会化の一環として捉え、監視化の傾向が強まる背景には、共同性を企図として捉える思考が働いていた。一見関係が無いように思えるが、企図による「われわれ」の形成は、誰もが平等であるという同質性からの集まりであるため、その同質性を脅かす不安を取り除くためであれば、監視カメラ等の監視技術の導入が受け入れられていく。つまり、「われわれ」全体という共同性の原理が前提となっているため、不安が同質性を揺るがす度に、同質性に基づいた「われわれ」全体を守ろうとすることになる。したがって、必然的に、「われわれ」全体を守る技術＝監視する技術を受け入れる方向へと進んでいく。

そして、gated community は監視社会化の方向で語られることが多い。本論文では、gated community という社会現象の背後にある共同性の原理を探り、違った角度で分析できたと考える。テロや SARS などの不可視の不安に対する情報・監視技術導入による解決は、さらなる不安を呼び起こし、同時に同質性に基づく「わ

れわれ’が希求、誘発され、排除の連鎖を生み出し続ける。しかし、論じてきたように、共同性の原理を探求すると、視角が変わることが分かった。リスクや不安という問題も、共同性という視点から再考する必要があると考え、今後の課題としたい。

他方、gated community を住民自治組織による共同統治の場として捉える立場には、共同性を「分有」とみる思考が働いていた。それは、コミュニティや人間の在り方の完結不可能性、つまり、有限性の自覚から始まる。

それゆえに、gated community は、各人の「制限」、「有限性」を受け入れ、それを住民自治組織で共同管理するという当事者意識に支えられたコミュニティへと変容する。そのコミュニティでは絶えず、「われわれ」という表明を行う動きを生み出し続けていくであろう。その理由は、動きの根底には、生活を営む経験の共有があるからだ。イスラム・スカーフ事件でいえば、社会的特質から始まる共同性ではなく、生活をその場で送るという当事者意識から始まる共同性である。だからこそ、有限性を受け入れることから、「われわれ」という表明が生じ続けるであろう。

本論文では、都市政策や住宅政策といった具体的提案・方策は全く提示できなかった。そのため、今後は、「まちづくり」や住宅問題といった具体的かつ現実的な問題に取り組むことを重要課題としたい。

[投稿受理日2005. 9. 30/掲載決定日2005. 11. 24]

注

- (1) ミシェル・フーコーの「権力」、「知」の分析が一つの分岐点をもたらしたといえる。フーコーは、近代的思考・言説がいかに様々な微視的な権

力連関から編成されてきたのかを分析した。その視点に依れば、自律的、理性的個人という近代的思考の前提もまた、フィクションに過ぎない。だから、共同性が、個人、また社会から成るのかという前提は問いなおさなければならない。したがって、「個人／社会」という近代的思考・設定から捉えきれない部分へと目を向けた共同性の考察が必要となる (Michel Foucault 1969a=1981)。そして、「社会学」の定義は次の辞典によっている。「社会学は社会現象を人間の生活の共同という視角から研究する社会科学である」[青井和夫 1993: 599-602]。

- (2) community は、地域社会、共同社会、共同体など様々に訳される。一例を挙げれば、フェルディナント・テンニースは、ゲマインシャフト (共同社会) とゲゼルシャフト (利益社会) に分ける。しかし、(注1) で述べた言説面においても、また現実には、都市、郊外、そして農村などに gated community が出現する状況からしても、この設定は成立しがたくなる。ここでは community を広義に捉え、何らかの人間の関係性が成立しているときに、community の成立と使い、その関係を成立させる原理を共同性の原理としておく (Tönnies 1887=1998)。
- (3) 9・11以降の情報操作については、(Nancy 2003=2004) や、(Foreign Affairs Japan 2003) がある。また、外国人に対する法律でも、確かに、2001年10月26日「アメリカ愛国者法 (USA Patriot Act)」によって、国民の安全を危険に曝す外国人 (alien) を拘禁することが許されていた。しかし、現在、2001年11月13日「軍事命令 (military order) により、テロ活動をしている疑いのあるもの (non-citizen) を特別の裁判にかけて、無期限に拘禁できるようになっている。(Giorgio Agamben 2002=2004)。
- (4) デーヴィスがいう要塞化の記述をまとめると、ロサンゼルスでは、包括的なセキュリティを求める努力として、都市計画、建築物、そして警察機構が一体となっている。セキュリティ完備やよそ者排除を目的に、公共施設は徹底的に縮小され、ストリートでは人気がなくなり、ますます危険が増している。

さらに、セキュリティ重視が過剰となり、ヒ

ドゥンヒルズ、ブラッドベリーなどといった「城塞町」が生まれる。そこでは、ぐるりと取り囲む塀、警備員が常駐する制限された入り口、警察と民間警備員の両方によるサービス、さらには私設車道すら整備されている。つまり、gated community である (Davis 1990=2001: 189)。

- (5) Wikipedia (無料百科事典) を検索すると、中国、メキシコ、ブラジルといった世界各地で、gated community は増えていることがわかる。
http://en.wikipedia.org/wiki/Gated_community (2005/9/24) ちなみに、日本で初めての本格的なセキュリティ・タウンは、積水ハウスが手がけた大阪郊外の「リフレ岬・望海坂」がある。
<http://www.sekisuihouse.co.jp/bunjou/misaki/home.html> (2005/9/24)

現在、タウンのコンセプトである「安全・安心の住まい・まちづくり」という町ぐるみのセキュリティが好評で、2005年12月において、第七期分譲が計画されている。

- (6) デーヴィスは、都市計画を、セキュリティ保護を軸に進めていく中で、異なった人間同士が物理的に接触しないように、至る所にアバウトヘイト的空間が生じてきていると記す。事例として、『ゲートッド・コミュニティ』では、カルフォルニア州のサンライズ・パームズを挙げている。この町は、南方にあるパーム・スプリングの人口増加・都心拡張と自動車交通量の増大から、自分たちの生活の質を保持するため、ゲートや誰がゲートを通じたかを追跡しうるコンピューター装置までも導入した。しかしながら、『ゲートッド・コミュニティ』では、バリケードが本当に、犯罪防止に役立っているのかは分からないが、確かに住民に心理上の安心はもたらしている、という (Davis 1990=2001: 191-196)。
- (7) 警視庁が公開した東京の犯罪発生マップ
<http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/toukei/yokushi/yokushi.htm> (2005/9/24)
- (8) ライアンも、gated community とハイテク監視技術の関連に、よそ者に対する不安が大きく関与しているという。さらに、この関連が人種主義を強化する傾向にあるとも述べる (David 2001a=2002: 101)。「9・11」以降、疑い・不安の文化と秘密主義の蔓延、監視と無条件の科学技術への信

仰が強化された。特に、疑い・不安が人間相互の信頼を打ち壊し、信頼を形成していくコミュニケーションの公開性が無視され、誰もが監視者、不安の対象と化す (David 2003b=2004)。他方、このような捉え方は、監視社会論の射程を狭めてしまう可能性もある。したがって、今後、監視社会についての両義性を追及する考察を進めていきたい。

- (9) この「CID」体制をとる集合住宅は、個人による私的土地所有という「プライヴァタイズム (privatism)」と、イギリスから輸入された田園都市構想の合体から成り、「プライベートピア」とよばれる (McKenzie 1994=2003: 22)。
- (10) 竹井氏は、以下のように、制限を定義している。「本来、社会の構成員の総意によって権力を付与された政府は各個人の権利を保護すると同時に『制限』を課し、その『制限』によって個人としてはなしえない利益確保を成就させる役割を担う。そして、各個人の権利に対する『制限』に正統性を与えるのは構成員の同意なのである」(竹井 2005a: 56)。
- (11) 西洋には、全一者でありたい願望、未知なものを既知なものへと取り込む「企て」の思考が存在し続けた。企ての思考が、禁欲・認識・救済・推論・保存と様々な形で現れ、核心は未来に打ち立てられた目的に向けて、いかに現在を合わせていくのかという「労働」の哲学にある (Bataille 1953=1978: 186)。本論文では、このバタイユの捉えた企ての思考による共同性を「企図」とし、ナンシーの共同性、「分有」は、「企図」の問題点を踏まえながら、それを批判していく共同性であるという視点を取っている (Nancy 1999c=2001: 28)。
- (12) 「現存在」の日常的様態として、「ダス・マン」として分析したのがハイデガーである。そのダス・マンとは、先の「数の凡庸化」に曝される人々の存在のあり方に他ならない。ハイデガーは、このような現存在のあり方を「頽落」と規定し、気晴らしに毎日を費やすのではなく、置き換えのきかない自分の「死」に直面することで、現存在は「共に相互に現れること Miteinandersein」へと立ち戻り、最終的に、「民族的共同体 Geschick」の一員としての自覚に至るという (Heidegger 1927=1994: 下326)。ハイデガーは、

現存在の世界を共同世界 (Mitwelt) として捉え、世界内存在を他者との共存在としての「共存在 (Mitsein)」だと把握する (Heidegger 1927 = 1994: 上260)。しかし、ナンシーは、ハイデガーが、共存在を死の先駆性から切り離し、日常的模样として捉えているとみる。つまり、ハイデガーの共存在は「民族」の共存在へと還元されていると批判する (Nancy 1999d = 2001: 28-29)。そこで彼は、ハイデガーの共存在に依拠し、さらに「共にあること」、共同性を展開していく。

- (13) ナンシーと同じように、モーリス・ブランショも、「共同体は、それ自身の内在性が成立せず、主体としてそこに所属することはできないというそのような不可能性を引き受けている。共同体は、いわば共同体の不可能性を担い、それを刻み付けている」と、共同体 (性) を完結不可能性という視点で捉えている (Blanchot 1983 = 1997: 25)。

- (14) この事件の発端は、1989年10月、パリの北オワーズ県クレイユのコレージュ・ガブリエル＝アヴェにモロッコ人の女子中学生三人がイスラムのスカーフを被って登校したことにある。その後、1992年、パリ北部郊外のあるコレージュで、13歳の少女が授業にスカーフを被って出席した。この事件は、様々な議論を集めた。まず、スカーフ＝女性の抑圧というフェミニズム問題、また‘イスラム’という政治的問題である。しかし核心は、政教分離のフランスにおける「非宗教性 (laïcité)」に対する聖俗不可分のイスラムの挑戦と捉えられたことにある。現段階において、2004年9月に「宗教シンボル禁止法」が成立した。

この事件と歴史的背景の紹介として、三浦信孝編2001にある。フランスの宗教シンボル禁止法でのスカーフ問題について、『朝日新聞』04.9.1, 朝刊, 東京版, 14版。『朝日新聞』04.9.4, 朝刊, 東京版, 14版。『朝日新聞』05.1.12, 朝刊, 東京版, 13版。などに記載されている。

- (15) テロリストたちは、人質との交換要求として、「宗教シンボル禁止法」の廃棄を求めた。
- (16) 『ゲートッド・コミュニティ』で、ゲートによるコミュニティの完成を目指した結果、反対に、コミュニティ意識が消失された事例として、カルフォルニア州ハリウッド・ホイットレー・ハイツをあげる。1990年から1994年にわたり、一度は建

設したが、最終的には撤去することになった。ゲートを巡る争いにより、弁護士費用、ゲート建設費用、精神的圧迫、資金集めなど種々の原因より、住民らのコミュニティ意識が無くなり、市のあり方は全く変わってしまった (Edward J. Blakely, Mary Gail Snyder 1997 = 2004: 123-127)。

参考文献

- David F. Noble. 1997. *The Religion of Technology: The Divinity of Man and the Spirit of Invention*. Penguin Books.
- David Lyon
- 2001a. *Surveillance Society: Monitoring Everyday Life*. Open University Press. 2002. 河村一郎訳. 『監視社会』青土社.
- 2003b. *Surveillance after September 11*. Blackwell Publishing Ltd. 2004. 田島泰彦監修 清水知子訳『9・11以後の監視』明石書店
- Edward J. Blakely, Mary Gail Snyder. 1997. *Fortress America: Gated Communities in the United States*. Brookings Institution. 2004. 竹井隆人訳『ゲートッド・コミュニティ』集文社.
- Evan McKenzie. 1994. *Privatopia*. Yale University. 竹井隆人訳. 2003. 『プライベートピア』世界思想社.
- Georges Bataille. 1953. *L'Experience interieure*, edition revue et corrigee, suivie de *Methode de Meditation et de Post-scriptum*. Gallimard. Paris. 1978. 出口裕弘訳『無神学大全 内的体験』. 現代思潮社.
- Gilles Deleuze. 1990. 『Pourparlers』宮林寛訳1992『記号と事件』『追伸—管理社会について』『管理と生成変化』河出書房新社.
- Giorgio Agamben. 2002. *L'état d'exception*. 「例外状態」高桑和巳訳, 2004『現代思想』Vol32-9青土社, pp142-152.
- Jean-Luc Nancy
- 1986a. *L'oubli de la philosophie*. Galilée. 2000. 大西雅一郎訳『哲学の忘却』松籟社.
- 1991b. *la comparution*. Christian bourgeois. Paris. 2002. 大西雅一郎・松下彩子訳『共出現』松籟社.
- 1999c. *La communauté désœuvrée*. Paris. Christian Bourgeois. Paris. 2001. 西谷修・安原伸一郎訳

- 『無為の共同体』以文社。
- 2000d. *L' intrus*. Galilée. Paris. 2000. 西谷修編訳『侵入者』以文社。
- John Tomlinson. 1999. *Globalization and Culuture*. polity press. 2000 片岡信訳『グローバルゼーション』青土社。
- Mark Poster. 1990. *The Mode of Information : Post-structuralism and Social Context*. Cambridge Polity Press. 室井尚 吉岡洋訳. 1991. 『情報様式論』岩波書店。
- Martin Heidegger. *Sein und Zeit*. 1926. 『存在と時間』細谷貞雄訳, ちくま学芸文庫, 1994.
- Maurice Blanchot. 1983. *La Communauté Inavouable*, editions de Minuit. 1997. 西谷修訳『明かしえぬ共同体』ちくま学芸文庫。
- Michel Foucault
- 1969a. *L'archéologie du savoir*. Gallimard. 中村雄二郎訳. 1981. 『知の考古学』河出書房新社
- 1975b. *Surveiller et punir: Naissance de la prison*. Gallimard. 田村俣訳 1977『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社
- Mike Davis. *City of Quartz : Excavating the Future in Los Angeles*. 1990. Verso. 2001. 村山敏勝 日比野啓訳. 『要塞都市』青土社。
- Nancy Snow. 2003. *Information War: American Propaganda, Free Speech and Opinion Control Since 9/11*. Seven Stories Press. 福岡良明訳, 2004『情報戦争 9・11移行のアメリカにおけるプロパガンダ』岩波書店。
- Richard Sennet. 1976. *The Fall of Public Man*. AlfredA. knoph. 1991. 北山克彦, 高階悟訳『公共性の喪失』晶文社。
- Tönnies Ferdinand. [1887] 1991. *Gemeinschaft und Gesellschaft*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 杉之原寿一訳, 1998『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波文庫。
- Zygmunt Bauman.
- 2000a. *Liquid Modernity*. polity press. 2001. 森田典正訳『リキッド・モダニティ』大月書店。
- 2001b. *Community: seeking safety in an insecure world*. polity press.
- 青井和夫, 1993, 「社会学」森岡晴美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣, pp599-602.
- 五十嵐太郎
- 2004a. 『過防備都市』中公新書ラクレ。
- 2005b. 「過防備都市の是非を問う」. 『都市住宅学』. 第48号. pp14-18.
- 竹井隆人.
- 2005a. 『集合住宅デモクラシー —新たなコミュニティ・ガバナンスのかたち』世界思想社。
- 2005b. 「米国のゲーテッド・コミュニティの実態とわが国への示唆—物理的閉鎖がもたらす真の課題とは」. 『都市住宅学』第48号. pp19-24.
- 林瑞枝「イスラム・スカーフ事件と非宗教性」三浦信孝編. 2001. 『普遍性か差異か』藤原書店, pp31-48.
- フォーリン・アフェアーズ・ジャパン編・監訳, 『ネオコンとアメリカ帝国の幻想』. 2003. 朝日新聞社。